

「イスカリオテのユダ」

マルコの福音書 14:10~21

はじめに

聖書は過去の出来事の中に未来が啓示された預言書です。つまりその記述の中に未来を見出す必要があるのです。その未来とは世の終わりについて、この今の時代が終わり、イエシュアが統治される「神の国」の到来です。今日もそのような視点で読み進んでまいりましょう。

1. 約束

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:10 さて、十二人の一人であるイスカリオテのユダは、祭司長たちのところへ行った。イエスを引き渡すためであった。

14:11 彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束をした。そこでユダは、どうすればイエスをうまく引き渡せるかと、その機をうかがっていた。

イエシュアの十字架の死と復活、この偉大な奇蹟、神のご計画は、まず「イスカリオテのユダ」彼の行動から始まります。ユダは祭司長たちにイエシュアの居場所を教え、また案内し、そしてその見返りとして金をもらうという「約束」を交わしたことが記されています。結論からしてここに描かれているこの「イスカリオテのユダ」は世の「終わりに近づくときのしるし（マルコ 13:4）」として現れる反キリスト、偽メシア、ヨハネの黙示録では「獣」と呼ばれる「荒らす忌まわしいもの（マルコ 13:14）」の、その「型」であると考えられます。ダニエル書の預言の中にこう記されています。

ダニエル書【新改訳 2017】

9:24 あなたの民とあなたの聖なる都について、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。

9:25 それゆえ、知れ。悟れ。エルサレムを復興し、再建せよとの命令（エズラ 1:2~3）が出てから、油注がれた者、君主が来るまでが七週。そして苦しみの期間である六十二週の間、広場と堀が造り直される。

9:26 その六十二週の後、油注がれた者は断たれ（十字架）、彼には何も残らない。次に来る君主の民が、都と聖所を破壊する（マルコ 13:2）。その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。

9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。忌まわしいものの翼の上に、荒らす者が現れる。そしてついには、定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる。」

これは「あなたの民とあなたの聖なる都について」すなわちイスラエルの民、ユダヤ人と、そしてエルサレムの聖所すなわち神殿について定められている「七十週」の預言と呼ばれるものです。今日、この預言の大半がすでに成就、実現しています。「都と聖所は破壊（され）…終わりまで荒廃が定められている」とあるように、現在エルサレムの神殿は存在せず、ユダヤ人たちはかつて第一、第二神殿が建てられた場所、神殿の丘に立ち入ることさえできない現状です。「七週」と「六十二週」つまり六十九週までの預言がすでに成就しており、そこで神のご計画の時計の針は今日 9:26 と 27 の間で止まっています。なぜならこの預言は「あなたの民とあなたの聖なる都について」つまりユダヤ人とエルサレム神殿についてのものであり、この二つがともに存在していて初めて成立するものだからです。今日多くのユダヤ人がエルサレムおよびイスラエルの地に帰って来ており、その数は年々増える一方ですが、最後の「一週」の預言の成就のためには、エルサレムに聖所と至聖所を有した神殿がどうしても建てられる必要があります。そこで「いけにえとささげ物」がささげられる、旧約聖書に記された、かつての礼拝儀式が回復されなければならないのです。話が少し横道にそれましたが、今は亡きそのエルサレム神殿がやがて再建されるその時、「多くの者と堅い契約を結」ぶ「荒らす忌まわしいもの」が現れます。しかし「定められた破滅が、荒らす者の上に降りかかる」ともあるように、その結末はまさに破滅です。今日の箇所は「イスカリオテのユダ」が交わす「約束」の出来事に始まり、後述します 14:21「人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです」というイエシュアの御言葉で区切られています。つまりユダの存在がダニエル書の預言に記された「荒らす忌まわしいもの」、獣と呼ばれる反キリストの姿と見事に重なるのです。このように、ここに記されているユダは、反キリストの「型」として見ることができ、それについての神のご計画の預言として捉えることができると考えられます。

2. 引き渡す

またここでユダが祭司長たちと交わした約束は、イエシュアを彼らに「引き渡す」というものでしたが、ここに使われているヘブル語はマーサル(מָסַר)といい、旧約聖書ではたった 2 回しか使われておらず、しかもそれらは同じ出来事の中であるにもかかわらず、ほとんど真逆のような意味を持つものとして使われています。

民数記【新改訳 2017】

31:5 それで、イスラエルの分団から、部族ごとに千人、すなわち、合計一万二千人の、戦のために武装した者たちが選ばれた。

31:7 彼らは【主】がモーセに命じられたとおりに、ミディアン人に戦いを挑み、その男子をすべて殺した。

31:13 モーセと祭司エルアザル、およびすべての会衆の上に立つ族長たちは出て行って、宿営の外で彼らを迎えた。

31:14 モーセは、軍勢の指揮官たち、すなわち戦いの任務から戻って来た千人の長や百人の長たちに対して激怒した。

31:15 モーセは彼らに言った。「女たちをみな生かしておいたのか。」

これはイスラエルがミディアン人を打つように主がモーセに命じられた出来事です。ここで「選ばれた」と訳されているのが聖書で最初のマーサルです。そしてそれは「【主】がモーセに命じられたとおりに」行う者たちを指し示す言葉であると言えます。しかし、民がミディアン人の女たちを生かして連れ帰って来たことを見てモーセは激怒し、そしてこう言います。

31:16 よく聞け。この女たちが、バラムの事件の折に、ペオルの事件に関連してイスラエルの子らをそそのかし、【主】を冒涇させたのだ。それで主の罰が【主】の会衆の上に下ったのだ。

ここで「イスラエルの子らをそそのかし、【主】を冒涇させた」と訳されている言葉も、同じくマーサルなのです。「選ぶ」と「そそのかす」、つまりマーサルには「主がお選びになったイスラエルの民、これをそそのかして罪を犯させる」という意味があるのです。「イスカリオテのユダ」についてのここでの記述が獣と呼ばれる反キリスト「荒らす忌まわしいもの」の「型」であると述べました。世の「終わりに近づくとき」、彼はユダヤ人たちの前に現れ、自分こそがメシアであると宣言して礼拝、崇拜、服従を強要し、主の選びの民であるイスラエルに「背教（Ⅱテサロニケ 2:3）」の罪を犯させます。その事実が、神のご計画としての預言がこの「引き渡す」と訳されたマーサルというヘブル語には表されているのです。

3. 水がめを運ぶ人

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:12 種なしパンの祭りの最初の日、すなわち、過越の子羊を屠る日、弟子たちはイエスに言った。「過越の食事ができるように、私たちは、どこへ行って用意をしましょうか。」

14:13 イエスは、こう言って弟子のうち二人を遣わされた。「都に入りなさい。すると、水がめを運んでいる人に出会います。その人について行きなさい。」

場面は変わってイエシュアと弟子たちのやり取りが描かれています。ここでイエシュアは二人の弟子に命じて「水がめを運んでいる人」について行くように言われます。この水がめのことをヘブル語でツァパハット(תַּרְבִּיט)というのですが、これが聖書で最初に使われているのが以下の出来事です。

I サムエル記【新改訳 2017】

26:10 ダビデは言った。「【主】は生きておられる。【主】は必ず彼を打たれる。時が来て死ぬか、戦いに下ったときに滅びるかだ。」

26:11 私が【主】に逆らって、【主】に油注がれた方に手を下すなど、絶対にあり得ないことだ。さあ、今は、枕もとにある槍と水差しを取って、ここから出て行こう。」

26:12 ダビデはサウルの枕もとの槍と水差しを取り、二人は立ち去ったが、だれ一人としてこれを見た者も、気づいた者も、目を覚ました者もいなかった。【主】が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠り込んでいたのである。

これはイスラエルの最初の王サウルとダビデの間に起こった出来事です。サウルはダビデの命をねらい、追って行きましたが、サウルが夜眠ったところに逆にダビデの方が一人の家来を連れて近づいて行くと

いう出来事です。ダビデの家来は眠っているサウルを見て殺そうとしましたが、ダビデは「【主】は必ず彼を打たれる」と言ってこれをやめさせました。そして「サウルの枕もとの槍と水差しを取り、二人は立ち去った」とあり、ここに聖書で最初のツァパハットがあります（ちなみに槍はこの後すぐサウルに戻しています）。ですからこの言葉には本来、ダビデがここで言ったように「【主】は必ず彼を打たれる」という意味が込められていると考えられ、それは神に聞き従わず呪われた王サウルを指しており、そして彼もまた獣と呼ばれる反キリストの「型」であると考えられます。イエシュアは「イスカリオテのユダ」を指して「人の子を裏切るその人はわざわいです。そういう人は、生まれて来なければよかったのです」と言われます。このユダが反キリストの「型」であるならば、人ではなく主であるイエシュアが「必ず彼を打たれる」のです。

そしてこのツァパハットにはもう一つ重要な神のご計画が秘められています。それは「だれ一人としてこれを見た者も、気づいた者も、目を覚ました者もいなかった。【主】が彼らを深い眠りに陥れられたので、みな眠り込んでいた」というその中で、「水差し」は運び出されて行ったという描写にあります。それは神に対して、その御言葉、そのご計画に対して誰もが眠っている、無関心になっている世界、そのような時代の中から運び出されて行く存在、そのような者たちのことを指し示していると考えられ、それはすなわち教会の携挙です。イエシュアを信じる信仰、いのちの水である聖霊を内に宿した器のような存在、それが私たち教会のあるべき姿です。このようにツァパハットとは本来、ただの水差し、水がめなどではなく、私たち教会の存在と、携挙というそれに対する神のご計画を指し示した言葉なのです。そしてさらにこれと同様の事実が次の記述にも表されています。

4. 用意

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:14 そして、彼が入って行く家の主人に、『弟子たちと一緒に過越の食事をする、わたしの客間はどこかと先生が言っております』と言いなさい。

14:15 すると、その主人自ら、席が整えられて用意のできた二階の大広間を見せてくれます。そこでわたしたちのために用意をしなさい。」

14:16 弟子たちが出かけ行って都に入ると、イエスが彼らに言われたとおりであった。それで、彼らは過越の用意をした。

二人の弟子たちが案内されていった場所、それは「二階の大広間」でした。「二階」と訳されていますが、ここに使われているアリッヤー(אֲרִיָאָה)は本来、「屋上（士師記 3:20）」を意味し、「上がる、地から立ち上る」という意味のアーラー(אָרָא)を語源とする言葉です。そしてイエシュアはそこで「用意をしなさい」と言っておられます。当然のことながらイエシュアはそこで「食事をしなさい」とは言われず、「用意」という言葉が強調されています。これもまた当然のことながら「用意」とは、何かをする前の段階、何かが行われる前の時間帯を指す言葉です。「終わりに近づくとき」世の終わりにイエシュアがこの地上に来られるイエシュアの地上再臨のその前に、教会がこの地から引き上げられるのがイエシュアの空中再臨による教会の携挙です。その事実が、神のご計画が「水がめを運んでいる人」から始まり「二階の大広

間」での「用意」に至る出来事その記述の中には「型」として表されていると考えられます。そしてその次にはイエシュアの地上再臨の「型」と言える記述が見事に記されています。

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:17 夕方になって、イエスは十二人と一緒にそこに来られた。

ユダヤ人たちの一日は朝からではなく「夕方」から始まります。しかし夕方の次に来るのはやはり暗い夜です。イエシュアはそんな時間に「そこに来られた」とあります。イエシュアはこの地上の夜を、暗闇の力を打ち滅ぼすために地上に来られるのです。夜が明けて朝になってから来られるのではなく、イエシュアご自身が地上の光としてこの世に新しい朝をもたらされるために来られるのです。すでに携拳によって引き上げられた私たち教会の聖徒たちを引き連れ、イエシュアは来られます。その事実、神のご計画がこの一文には表されていると考えられます。イエシュアの地上再臨はイスラエルにとって、また私たち教会にとっては至上の幸いですが、それ以外のものたち、すなわち獣と呼ばれる反キリストとそれに従うものにとってはわざわざいす。その事実が次の記述に表されています。

3. 裏切る人

マルコの福音書【新改訳 2017】

14:18 そして、彼らが席に着いて食事をしているとき、イエスは言われた。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人で、わたしと一緒に食事をしている者が、わたしを裏切ります。」

14:19 弟子たちは悲しくなり、次々にイエスに言い始めた。「まさか私ではないでしょう。」

14:20 イエスは言われた。「十二人の一人で、わたしと一緒に手を鉢に浸している者です。」

14:21 人の子は、自分について書かれているとおり、去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわざいす。そういう人は、生まれて来なければよかったのです。」

ここで「裏切る」という箇所に使われているヘブル語は、先ほどの 14:10~11 で「引き渡す」と訳されていたマーサルです。ですからイスラエルをそそのかし、彼らに罪を犯させる反キリストのその姿がここでも再度指し示されているのです。反キリストは「あなたがたのうちの一人」つまりイスラエルの同胞、友のようなふりをしてやって来ます。また「わたしと一緒に」つまりイエシュアすなわちメシアのようなふりをして人々を騙します。そのような者に対しイエシュアはこう言われました「人の子は、自分について書かれているとおり、去って行きます」と。「去って行きます」と訳されていますが、これはどこか遠くへ行ってしまうという意味ではなく「進んで行く、仕える、働く」という意味です。「自分について書かれているとおり」にイエシュアは事を行われるのです。ここに「書く」という意味のカータヴ(כָּתַב)が使われていますがその最初の言及を見てみましょう。

出エジプト記【新改訳 2017】

17:13 ヨシュアは、アマレクとその民を剣の刃で討ち破った。

17:14 【主】はモーセに言われた。「このことを記録として文書に書き記し、ヨシュアに読んで聞かせよ。わたしはアマレクの記憶を天の下から完全に消し去る。」

このように、カータヴにはあるものの存在を、その記憶までも「天の下から完全に消し去る」という意味があるのです。ですから「去って」行くのはイエシュアではなく、むしろ獣、反キリストの方です。彼はやがて私たちとはいっさい関りもつながらない、その存在を見ることも感じることもないほどに遠く引き離されていきます。では最後に彼に対する裁きをお見せしましょう。ヨハネの黙示録です。

ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:19 また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。
19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

「生きたまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた」とは、死ぬことはなく、ずっとそこで「生きたまま」でいるということです。まさに「生まれて来なければよかった」というイエシュアの御言葉がここに成就するのです。神を信じない、敵対するものへの神の裁きは、なんと恐ろしいことでしょうか。

ルカの福音書【新改訳 2017】

12:4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。

12:5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

伝道者の書【新改訳 2017】

12:12 わが子よ、さらに次のことにも気をつけよ。多くの書物を書くのはきりが無い。学びに没頭すると、からだが疲れる。

12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。

以前ある方が「自分には神への恐れがない。そのような感情がわからない。」と言って悩んでおられました。たしかに今の私たちは、神ではなく人を恐れ、苦難や死を恐れて、御言葉ではなく自分に従って生きています。しかしやがてイエシュアによって建てられる「神の国」では、私たちはその「すべて」において「神を恐れ…神の命令を守」る者へと変えられるのです。聖書は今を生きる私たちへの命令書ではありません。今を悩み苦しみ、耐え忍ぶ者たちへの未来の希望を、神のご計画の完成を指し示した福音書なのです。ですから祈りましょう。イエシュアについて「書かれているとおり」になりますようにと。